



目次

- P1 春季企画展 キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展 開催
P2 「開館25周年記念 宮崎駿監督が語る佐川修さんとハンセン病資料館」開催
P2 ソーシャルワーカーを目指すあなた達へ

- 坂手悦子氏講演会開催
P3 資料紹介 その③ 「深敬」の扇
P3 研究から フィリピン研修に参加して
P4 資料館の現場から その⑩ 団体受付業務について
P4 お知らせ／利用案内

春季企画展

キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展 開催

2019年度春季企画展は、「キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展」を開催します。

菊池恵楓園（熊本県合志市）の入所者による絵画クラブ・金陽会は、1953（昭和28）年の発足以来、約20人のメンバーが活発に活動をつづけ、850点もの絵画作品がのこされて現在に至っています。

絵画サークルは、全国の療養所の文化活動の重要な一角を占めてきましたが、活動が一時的であったり、作者の没後に作品が処分されたりして、その全貌を知することは困難なケースがほとんどです。

しかし、菊池恵楓園の金陽会は、質・量ともに高

い水準の作品が保存され、これまでも地元・熊本をはじめ、各地で展示会が行われるなどその価値が注目されてきました。今回の企画展が、東京での初開催となります。

隔離を象徴するコンクリート壁や納骨堂を描

いた作品、引き離されたきょうだいや家族をモチーフとした作品、帰ることのできない故郷を懐かしんで描いた作品など、金陽会の代表的な作家10人による作品を約30点展示します。

さらに、金陽会のメンバーによって1950年代～2010年代まで描き継がれた菊池恵楓園の園内誌『菊池野』の表紙絵を、一挙にご覧いただけます。

金陽会のリーダー的存在であった吉山安彦氏（90歳）は、「金陽会は、仲間たちのおりなすハーモニーだった」と述べています。自由に絵を描き続けてきた、個性豊かな仲間たち。——タイトルを「キャンバスに集う」とした理由もここにあります。

病気、障害、療養所の制度などにより、生活全般が大幅に制約される境遇にあっても、絵を描くことに懸命にとりくみ、生きがいを見い出して前向きに生きてきた姿を作品から感じとっていただければ幸いです。貴重な機会をお見逃しなく!!

（木村哲也）

会 期：2019年4月27日（土）～7月31日（水）

会 場：企画展示室

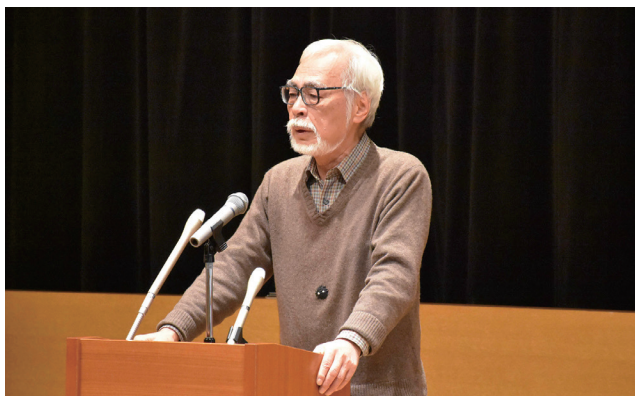
入場料：無料

※予定が変更になる場合がございますので、当館ホームページをご覧ください。



奥井喜美直「アマダイ」（1999年 油彩）をあしらったポスター

「開館25周年記念 宮崎駿監督が語る 佐川修さんとハンセン病資料館」開催



当館は、1993年に高松宮記念ハンセン病資料館として開館以来、お陰様で25年を迎えることとなりました。その間、立ち上げから長年にわたり当館運営委員、語り部として、資料館を牽引してこられたのは佐川修（金相権）さんでした。去る1月27日、昨年逝去された佐川さんを偲び、当事者の皆さまが作り上げた当館のあゆみを知っていただくため、佐川さんが中学生に向けて講演されたDVD上映とあわせ、親交のあった宮崎駿監督から佐川さんと資料館の思い出をお話ししていただきました。

宮崎監督は、「もののけ姫」制作をきっかけに来館したと、佐川さんとの出会いについてふれながら、「佐川さんは本当に資料館が好きだった。佐川さんからおそろかに生きてはならないということを学んだ」と、時折涙を浮かべながらお話しくださいました。

参加者からいただいた感想には「佐川さんの語りに胸を打たれた」、「宮崎さんと佐川さんとの友情の深さに涙を誘われた」等、生前の佐川さんを知っている方だけではなく、初めて知る方にも深い感動をよんだようです。

最後に佐川さんの奥様である幸子さんから監督への花束贈呈を行い、宮崎監督からはスタジオジブリの吉田昇さんが佐川さんを想って描いた絵画「プロミンの光」が渡されました。

本イベントでは定員110名に対し、約5倍もの応募があり、やむを得ず参加者の抽選を行いました。

今後も様々な企画を立てていきたいと思っておりますので、ご参加いただけますようお願い申し上げます。

(金貴粉)

ソーシャルワーカーを目指すあなた達へ 坂手悦子氏講演会開催

昨年12月22日（土）、講演会「ソーシャルワーカーを目指すあなた達に伝えたいこと」を開催しました。この講演会は、幅広い年齢層の方々にソーシャルワーカーという仕事を通してハンセン病問題を知っていただこうと企画したものです。

講師である国立療養所邑久光明園のソーシャルワーカー・坂手悦子さんは、大学生の頃にはじめて訪れたハンセン病療養所で、困難な状況でも希望をもって生き抜いてきた入所者のことを知り、その経験が足がかりとなって現在の職業に就くことを決めました。

坂手さんは療養所のソーシャルワーカーとして、長い隔離政策によって家族関係が希薄な入所者の金銭管理や里帰り、葬儀に関する事などその多くが家族の代わりとなるような仕事をされています。

国賠訴訟の判決直後には、国からの補償金を家族にも渡したいという多くの入所者からの相談を受け、家族への連絡や搜索に奔走しました。しかし、ようやく見つけた家族から連絡を拒まれたこともあったと自身の経験についてもお話しされました。

坂手さんの講演を通して、ハンセン病に対する偏見・差別が今でも根強く生き続けていること、そして困難を抱えた人々に懸命に寄り添うソーシャルワーカーの姿を知ることができました。

今後も講師の職種をかえて同様の企画を開催していく予定です。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

(橋本彩香)



資料紹介 その③

「深敬」の扇



日本では、国により療養所が設置される前から、私立の療養所が存在していました。キリスト教を背景に外国人が設置したものが多い中、ひとつだけ日蓮宗の僧侶がつくった療養所がありました。綱脇龍妙つなわきりゅうめうが始めた身延深敬園です。今回はこの綱脇が、「深敬」の文字をしたためた扇を紹介します。

身延深敬園みのぶしんきやうえんは1906（明治39）年、身延山久遠寺三門のすぐ脇の、身延川の対岸に設立されました。身延川の河原に粗末な小屋を作り、門前で物乞いをしてどうにか生きていたハンセン病の患者たちを助けたいとの思いから、一僧侶だった綱脇が、総本山久遠寺の法主に直談判して手に入れた土地と小屋がはじまりでした。綱脇は運営費集めに奔走し、10万口を目標に、3年間毎日一厘ずつ貯金して寄付してもらう、十万一厘講という募金の仕組みを考案しました。この一厘講は、入園者の生活を支えるのに役立ちました。

身延深敬園は他の療養所と異なり、初期には宿泊施設的な側面も持っていたようで、入園者の出入りが比較的多い療養所でした。1992（平成4）年閉園し、身体障害者施設かじか寮となりましたが、敷地には療養所当時の建物や墓地が残されています。

さて扇に記された「深敬」の文字は、法華經常不輕菩薩品第二十きやうほんの中の文句「我深敬汝等（我れ深く汝等を敬う）」から来ています。綱脇はこの二文字を、30才で療養所を設立した時その名に用い、88才を迎えてもこの扇に記しました。「深敬主義」と名づけて常に唱導してきたというほど、綱脇の生き方にとってずっと大切な言葉であり続けたのでしょう。なお「日琢」は綱脇の法名です。

（稲葉上道）

研究から

フィリピン研修に参加して

2018年12月2日から8日にかけて、私と木村哲也の2人（事業部事業課）が、「国立ハンセン病療養所医療従事者フィリピン研修」（笹川記念保健協力財団主催）に参加しました。「エバースレイ・チャイルズ療養所・総合病院」、「クリオン療養所・総合病院」、「ホセ・レイエス記念メディカルセンター ハンセンズ・クラブ」等を訪れ、フィリピンにおけるハンセン病およびハンセン病問題の現状、フィリピンにおけるハンセン病にまつわる歴史資料保存の取り組み等の一端を実見することができました。

日本では現にハンセン病を患っている患者さんを見ることはできないので、患者さんの症状や境遇を見聞きできたのは得難い経験でしたが、最も興味をひかれたのは、エバースレイやクリオンにおける歴史資料保存の取り組みでした。

その取り組みは、日本とは比較にならないほどの少ない予算と人員で行われています。クリオンでは、回復者2世で、理学療法士として働いているドナという20代の女性が展示の解説をしてくれました。自信と誇りに満ちた瞳でクリオンの歴史を説明するドナの姿は、ひととき印象的でした。

最後に訪れたマニラのホセ・レイエス記念メディカルセンターでは、奇しくもドナという名前のハンセン病を患う5歳の少女に出会いました。ドナは不安のあまりか、話を聞いている最中に泣き出してしまいました。フィリピンでもハンセン病に対する差別は残っていますが、患者の多くは将来の希望を抱いて治療を受けています。5歳のドナの瞳が、クリオンのドナのように、いつの日か自信と誇りに満ちたものとなることを願わずにはいられませんでした。

（大高俊一郎）



ドナ（写真左）の案内で展示室を見学

資料館の現場から その⑩

団体受付業務について

今回は、団体受付業務について紹介します。主な業務は、申込受付から、スケジュール管理、当日のお出迎えから館内での対応、お見送りまで多岐にわたります。対外的に資料館の印象を左右する責任ある仕事です。事前ガイダンス等を担当する学芸員など、館内の他業種との連携も欠かせません。

私は、資料館が国立となった2007年から働きはじめました。当時、団体の対応は学芸員が行っていましたが、2009年4月から、団体受付業務の担当となりました。

かつては多磨全生園入所者の佐川修さん（故人）、平沢保治さんのお二人が、語り部としてご自身の体験をお話されていましたが、現在はお二人の講演をおさめたDVDを視聴していただいています。お二人とも来館者を増やすことを大切にされており、どのようなお客様にも常に歓迎の姿勢だったことが印象的です。お二人の語り部活動によって、資料館の認知度も上がり、右肩上がり以来館者が増えました。お二人のそばで仕事できました事は、私にとりまして大きな大切な宝物です。

現在、1年間に470団体、1万7327人が見学に来られています（2017年度）。個人も含めた全体の入館者が約3万人ですから、団体のお客様は半数以上となります。

数だけでなく、団体の種類もだんだん幅広くなっています。最初は少なかった企業の研修も増えていきますし、看護学校も近隣の学校がほとんどでしたが、今では北海道から九州まで、遠方から来られるケースも増えていきます。小学校でも、熱心な先生が異動先で新たに見学を始められたり、子どものころに見学に来たことがきっかけで、先生となってから自分の教え子たちにも見学させたいと来館してくださるケースもあります。

資料館は回復者の名誉回復の施設ですが、ここへ来てくだされば何か宝物が見つけれられる、そういう場所でありたいと願っています。

（曲木昭枝）

お知らせ

■『国立ハンセン病資料館 研究紀要』第6号が刊行されました！

- ・稲葉上道「日本のハンセン病対策通史」
- ・阿部安成「書史を伝えること、書史から考えること」
- ・儀同政一・金貴粉「国立ハンセン病資料館事業部社会啓発課の活動と展望」
- ・成田稔「北條民雄の日記などからその生死観その他をうかがう」以上、論文4本と、
- ・「映画『あつい壁』上映会 中山節夫監督講演会」
- ・「『もう一つの橋』上映会&トークイベント 中尾伸治氏講演会」
- ・立石富生氏講演会「生誕100年 島比呂志の生涯と文学」以上、講演録3本を収録。

当館受付にて配布しています！

利用案内

■開館時間 9：30～16：30（入館は16：00まで）

■休 館 日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入 館 無料

■交 通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・ＪＲ武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>